

水仙やしばらくわれの切れさうな

その心地を「われの切れさうな」と表現したことの繊細さ。生きていればこそ、世界の鋭利さに傷つく思いがすることもある。「しばらく」という時間に佇む作中主体は、「水仙」という冬の清澄な水辺を想像させる季語の空間で、自分を見つめ直しているかのようだ。「水仙」という言葉のもつナルシズム、自意識あるいは若々しく屹立したようなその咲き方もまた、「切れさうな」として感じられる。

強霜に日のさす如し磯の人

「強霜」は霜の多くおること。冬の鋭利な朝日が一面の霜に刺さるような光景が、一拳にイメージされる。面白いのは、それがリアリズムの光景として句に描かれているわけではなく、「如し」と直喩が用いられていること。前述の強烈な光と冷たさのイメージを引きずりながら、それは「磯の人」の立ち姿へと一気に転換されるのだ。「如し」の直後に意味上・文法上の断絶があり、「磯の人」に続く。この「断絶」＝俳句用語としての「切れ」のもつ力の、ひとつの発揮である。

逢引のこえのくらがりがりさくらんぼ

「さくらんぼ」はふたつでひとつに繋がっているイメージが内

包されているので、その観点からは「逢引」とかなり接近した言葉遣いであり、やや陳腐な印象がある。しかしながら、この句の見所は「こえのくらがりがり」である。この一語で、禁断の恋のような、ささめき声が思われる。それこそ、静かで薄暗い空間でさくらんぼをカクテルに沈めているような想像（というよりもはや妄想）が読者を襲う。

雲ふかくゆきて帰らず毛虫焼く

同じ雲が帰ってくることは決してない。それはひとつの真理を把握したフレーズである。夏雲が空を深く、さらに深く進んでいく光景の下で、毛虫が焼かれて駆除されている。多くの毛虫が、火の力で一斉に滅んでいくところだ。旺盛な雲の往来と、毛虫の業火との対比が鮮やかであり、また、毛虫も雲のような質感と速度で、どこかへと、深く深く、遠のいてくような心地がする。

白鷺の風ばかり見て昼かな

白鷺という季語には、夏の燦々とした光が伴っている。その大鳥に吹く風の動きを、作中主体はずっと眺めているのだ。それも、昼の上から。「昼かな」の一語で、作中主体が窓を開け放った昼の上におり、木と紙でできたその伝統的な日本家屋を、白鷺とおなじ風が吹き抜けているのだということが示唆される。納涼の一

景が、緊密な語の連なりによって表現されている。

なかなかの母の声澄む露の臺

「なかなかの母の声」という引き締まった表現が心地いい。「母の声が澄んでいて、なかなかいい声だ」という意味内容だと解釈するが、それを「なかなかの」という句の入り方で支えたのが一興だ。「声」が「澄む」と清澄な空間を想像させてからの「露の臺」という落とし方も、憎いほど達者だ。春の山路に露の臺が芽ぐんでいるというだけのささやかな瞬間だが、それはこの世界に対する賛歌に他ならない。

麦踏みのひとつの乙女のおほつぶり

「麦踏み」は春先に芽吹いた麦を踏む農作業のひとつ。こうすると根の張りがよくなるという。この句では「ひとつの」の直後で軽く「切れ」が入っていると解釈した。遠いものにだんだんと近づき、把握を深めていくという文体がうまく扱われている。遠くにいる「麦踏みのひとつ」に目を凝らすと、実はそれが「乙女」であり、しかも「おほつぶり」、つまり頭が大きいということに気がつくという諧謔。「遠くにいる割に頭が大きく見える……」というような遠近法の混乱を面白く描いている。文体とはつまり、人間の認識の秩序を再構成する営みだと思う。

裏方の僧が動きて麦の秋

何らかの法要や行事なのだろうが、確かにそれは僧侶たちにとっての一舞台であり、ある意味では「パフォーマンス」の機会に他ならない。そこには、人々の目を集める役回りもあれば、そうではない裏方仕事というのものもあるのだろう。麦の秋（夏の季語。麦の充実した収穫期をさす。）という空間的なひろがりのある季語の力によって、そんな下積みの僧が働く様を、遠くから眺め、心を寄せているような面持ちがするのだ。今までそんなことを意識したことはなかったが、「裏方の僧」という言葉の喚起力が一句を立ち上げた。

貧農はどこより解かれ雪降り

開拓移民として太平洋戦争終戦間際に北海道に渡った俳人・細谷源二の（地の涯に倅せありと来しが雪）を思い出した。「解かれ」という大仰な表現の動詞を踏まえると、封建制から近代的土地所有制度へと変遷した歴史を思い浮かべて読めばいいだろうか。それも実際にはおそらく、歴史書では書き落とされた、個人個人の差があったはずだ。そして、貧農はどこへ向かったのか。かつて耕していた土地に、雪が降る。雪はレクイエムのようにあるし、あるいは、更なる困難を示唆しているかのようでもある。

鏡台に汗ばむ程と思うべし

「思うべし」と語りかける相手が誰なのか、判然とはしない。しかし、「鏡台に」という上五（冒頭の五音）を得たことで、それが鏡に映った自分自身なのではないか、と思われてならなくなる。その火照った顔と向きあうとき、いつもは身支度の途中で淡々と用いているだけの鏡の顔が、違って生き生きと見えてくるような感覚。と同時に、自分の存在が揺らぐような、ひやりと替かされるような、その感覚にとりつかれはしないだろうか？

*

*

*

ここに取り上げた句はいずれも、九千を数えるアウトプットの中から僕の一存で取り上げた作品である。AIの教師データ自体はそれぞれ俳句作家が過去に詠み上げた作品の数々であり、もちろんそれぞれの作風が映じている。その影響を受けているとはいえ、AI俳句自体を統一的な作風として語ることは難しい。しかし、このようにして拾い読みしていくと僕には何故か、やや虚無的な自意識をもった主体の存在が感ぜられてならなかったのである。そしておそらく、そのような主体はとて、僕自身に対する自己認識に近いことが恐ろしい。――皆さんはどうだっただろ

うか？ 僕は僕を通してしか、他者を見ることができないのではないか。AIの作品はさながら鏡のように、そこにひろがっている。

明治から昭和にかけて俳壇に君臨した大俳人・高浜虚子に「選は創作なり」という言葉がある。このようにして他者の作品を選びだすこと自体もクリエイティブティの発露であり、しかも、それは他者を擬制する行為になりうる。その危うさと快感の狭間で、俳句は読まれ続けていく。